

令和3年度 教育事業 曾爾ボランティア養成研修



1. ねらい

- ①青少年教育施設の概要、運営、事業等について理解する。
- ②ボランティアとして必要となる知識・技能を習得する。
- ③ボランティア活動の内容や役割、対象者等について理解し、活動の楽しさ、自然のすばらしさを体験する。

2. 実施日

5月15日(土)～16日(日) 1泊2日

3. 対象者

高校生以上

4. 参加者 / 募集定員

17名 / 20名

(高校生：5名、大学生7名、社会人5名)

ボランティアスタッフ 5名

5. プログラム (要約)

曾爾青少年自然の家の活動を支え、社会に貢献できる人材を育てることを目的に、自然体験活動を行うための知識・技術が学べる講習をめざした。ボランティア活動の意義を知り、施設ボランティアの役割やボランティア活動の魅力伝える機会とした。

新型コロナウイルス感染症が拡大する中、10日前からの体温等の健康チェック、各個人にアルコール消毒液を渡す、宿泊室の個室利用、講習中のソーシャルディスタンスの確保、室内会場の換気実施など考えうる最大限の対策のもとに実施した。野外炊事、キャンプ(キャンドル)ファイアーなど様々な野外活動の実施方法を体験したうえで、知識・技術を身につける研修を行った。

スケジュール

5月15日(土) 1日目

オリエンテーション・アイスブレイク
青少年教育の理解
青少年教育施設の役割・運営
ボランティア活動の技術(野外炊事)
キャンドルファイアー
青少年教育施設におけるボランティア活動

5月16日(日) 2日目

安全管理(救急法含む)
ボランティア活動の意義と理解
曾爾ボランティアについて(ボランティア登録)

【1日目】5月15日(土)

はじめに、参加者、スタッフと共に2日間のめあてやボランティア養成研修のねらいを共有した。今回の講習の中での新型コロナウイルス感染症対策を伝え、確実に実施するようお願いした。その後、自己紹介やお互いを知る活動を行いながら、アイスブレイクを行った。

天理大学体育学部 蓬田高正氏より、「青少年教育の理解」の講義があった。青少年教育のこと、子どもたちの現状、自然体験活動がなぜ子どもたちに必要なのかなど、ボランティア活動に必要な基本的な知識等について解説していただいた。午後は、「青少年教育施設の役割・運営」の講義があり、青少年教育振興機構や自然の家の取り組み、設置目的について理解を深めた。

その後の「ボランティア活動の技術」では、基本的な方法を聞いた後に個別に、火おこし、野外炊事を実施した。

夜は、キャンプファイアーの目的、実施方法、考え方を聞いた後、ファイアーの実際の流れについては、キャンドルを囲んで、ゲームなどを通して体験した。先輩ボランティアの指導を目の当たりにし、自分もこのように指導できるようになりたいという想いがわきあがったようだ。

最後は、先輩ボランティアによるボランティア活動や事業の紹介が行われ、より詳しく知りたい事業についてグループごとに意見交換をしながら交流を深めた。





【2日目】5月16日(日)

大阪体育大学講師 徳田真彦氏による「安全管理」の講習と演習があった。講師の都合でリモートによる実施となり、アシスタントをボランティアが務めながら実施した。リスクマネジメントについて理解を進めつつ、とくにリーダーとして対応することが多いファーストエイドを中心に行った。



最後にこの研修のふりかえりを行った後、法人ボランティアの登録手続きについての説明が行われ、2日間の講習を終えた参加者は各自で登録を行った。

6. まとめ

曾爾の特徴でもあるが、小中学生の頃に自然の家の長期のキャンプに参加してきたキャンパーが、高校生になってボランティア養成研修を受講し法人ボランティアになるという流れがある。次世代の参加者(キャンパー)の支えとなるよう、「指導者」に意識を切り替えて、様々な年代の様々な経験のある人たちとかがわってほしいことを始めに伝えた。そのことでボランティアとしての活動も可能性も広がっていくという考えからである。

コロナ禍にあって、久しぶりに人と会えた喜びがあり、気が付いたときには近づいて話している場面が多く、そのことを注意しなければならないことが多かった。そのくらい心の距離は近づいており、2日間の講義や演習を通して「ボランティア」の役割や意義を理解し自然体験の基礎基本を学んでもらうことができた。

参加者の感想を紹介する。

- ・ふだん子どもとかかわることがなくて、どうやって接したらいいかわからなかったけれど、活動を通して学んでいけばいいのだと思った。
- ・講習の中でよく聞いた「メンバーズ(参加者)ファースト」を実行していきたいと思った。
- ・参加者の前ではニコニコ活動しているボランティアが実は「子どものためにいろいろ考えて行動しているんだ」ということが分かった。
- ・若い参加者に囲まれて楽しく学びました。「15歳からボランティア」を意識し参加されていることに驚きました。ボランティアは「してあげる」のではなく「共に」活動するんやなということも改めて確認できる場でもありました。

年齢や立場にかかわらず、そして自分で選んで参加する。ボランティアでは大切にしなければならないことである。活動の機会をたくさんつくり、どんどん活躍してもらいたいと思う。ボランティアコーディネーターとして改めて身が引き締まる思いがした。

(企画指導専門職 高瀬 宏樹)

